



# 九月号



今月の十人+1

婆萎萎

鳳凰原岬

秋海棠

タオ・ピカミクルティイ

深山睦美

武井窓花

全美

彩結ゆあ

森屋たもん

きんかく

ただのたなか

発行人 鳳凰原岬  
二〇二五年九月十日 発行

## 婆萎萎

夕暮れは夕暮れでしか無いことを思冬期ながら思い初めたり  
にっぽんに西洋背高泡立草群れて外来種なる烙印

うつせみの一生懸命働くけども吾に都序は光らせられぬ

自由とう痛み捨てれば畜生が愛玩動物となるおかしみよ

そらにみつ大和言葉に愛充ちて『祖国と呼べ』ばアナフィラキシー

ちにみつる三千年の共和国血と言えり地と言えりやとなり國

ペンギン逃げたるのちも神王の妻ヘラのごと不屈のあなた

機械化の末路と思う犬笛で喉笛噛み千切りマシーン来ぬ

大きすぎて己が足すら搔けずいる亞細亞超大国のみどり児

氷河期と聞けばいつからか思い出す凍死せしマンモスの展示

## 晴れのちイチ・ニー・酸性雨

さくらばな咲いていないと誰も見に来てはくれないいろの花びら  
飾るのに邪魔な葉っぱをもぐように天使の羽根は一枚でいいや

風花は花にあら無い徒花は実を付けぬ花 冬のくるぶし

剪定は選んで切つて拾うこと梅枝落とせば冬のはじまり

本当は花の名前も知らなくてただ花とだけ思い眺めた

苦しみを腕ごと床に落とせたら天使の羽根なる名のランドセル

実を食べるのが上手ければイブとなり暗い夜道を恐れなくては

人と会うために履くときいつもよりきつめに締める靴紐のエックス

血統のいらない枝も払いしたい真っ直ぐな系統樹であれば

秋が来る気配ひのもと炎上するそのくれないの葉を踏みしめて

## 剪定式

## 秋海棠

## 聖☆お兄さん 鳳凰原岬

そう言つてくれると助かりますけど言われなかつたので死んじやいました  
成金が和牛の寿司を喰う金でおれはトイペをトリプルにした  
友達がほしいと書いたマッチングアプリのプロフ嘘くさくない?

適切な贈り物については聖☆お兄さん18巻をご参照ください

聖紋を腹に刻めば禁欲がうまくなつたりするんだろうか

自転車の好きなところはどこまでも行けそうな気がするところです

Blackを馬鹿正直に黒人と訳した人は誰なんだろう

牛丼は値下げしなくていいんだよその分なんか減つてそうだし

脇汗はえろいし額にかく汗は 背徳感と思つて見てる

あくびつて伝染つたふりでどさくさに紛れて匂い嗅げるから好き

## 顔立ちに舞う タオピカミクルティ

偽りの歯が増えるたび正しさが遠のいてゆくような気がして

たましいは言葉にすると嘘っぽい紙の上のみにて光る夢  
やわらかい唇のひとは性格が頑なという個人的統計

怒りにも蜜をひと匙どんな顔をしていたつて月の眩しさのひと  
荒事と書いてはなのと読めるらしあなたのはなの顔立ちに舞う  
聞き飽きた蝶形骨の話とかやめて背骨の愛を語ろう

いつか遺跡が発掘されて抱き合つた形で発見される遺骨に

人生はすべて生前となること死んでようやくまとまる消しカス

目の中にあなたを飼つてあげられる午後12時から午前9時半

歯触りがあなたに似てる豚肉をパックに入れる食肉部門

こんにちはラーメンつけめんぼくお花参政党の支持率が二位

おままでともう揃わないルービックキューブみたいな顔をしたまま

そのビー玉が転がることをやめる日が夏ならいいね 夢の坂道

ワンピース ネタバレ で検索するよ明日鏡を手に取る僕たちは

レーズンをほじつて捨てた指先にレーズンパンの絶望の色

ありがとう生きてる意味を思い出した 高輪ゲートウェイ駅 潰す

ちいかわの誰かを通して君を見たただ揺れている鞄の端で

脳内でゴジラのテーマ流れ出す歌詞の全てを自殺に変えて

偽ペットショップにならぶ偽ペット抱きしめるたび迫る潮騒

今ここで全部やめていいんだよ建設中のビル背伸びして

## ある画家、宇宙と話すひと 武井窓花

妖怪が出たつていうよみずうみに恥ずかしかったのかもしれないね  
葉はすでに眠り支度とあとすこしやり残したことがあるらしい

ある画家がむかしむかしにここへ来て見かけたという銀色の鹿

コンパスは捨ててしまつてそれからは宇宙と話すひとになりました

光つたらいろんなものが寄つてきてけがをするからそつと飛びなさい

筆で描くわすれなぐさが野に下りて泣くための四季とはと講義する

犬の毛を上手に撫でるひとなので王様にもきつとなれるでしょう

猫の喉を上手にならすひとだからきっと立派な汽車に乗るでしょう

高原で羊飼いらが笛を吹く明け方そちらへ行きますからね

## 少年たち 彩結ゆあ

ハンモック耐えられるだろか僕たちのレモンピールチョコレートサマー  
流星群あの丘へ行こう僕たちは今日から死ぬまで春纏う青

あっちからこっちまでと決め空を無理やり絵にする人がたくさん

行かないで追いかけさせて 空 何も知らないふりが上手でため息

覚えたてのペトリコールという響き 先延ばしした白紙の日記

百年後の世界が今よりキモくても関係ないと思う側の自我

クリームのないメロンソーダを検査してたましいのこと話したい僕と

後悔を海に沈めるしづかなる海で豊かに暮らしていくね

なつかしさ辿つていけばみんな他人 花を辿つていけば宇宙だ

## ワンピース ネタバレ 深山睦美

手土産にあんぱん二つ私の分と母の分坂道下る

のんびりと忘れる人の手を握り名前を三度耳元で言う

介護付老人ホームに住む母の部屋は三階北側にある

ほんとうは帰りたいのよと囁いてヘルパーさんへの気遣い忘れぬ

ミサイルが頭の上を過ぎてゆく朝のコーヒーがぬるくなつてゆく

痛みと生きる人の痛みを知れというのは無理な話で

戦前と戦後という乱暴な分け方の住む星がまだ青い

たましいの抜けきつた花は骨になりそれが紫陽花とわかればこそ

たましいの花は骨になりそれが紫陽花とわかればこそ

## 誘えなかった きんかく

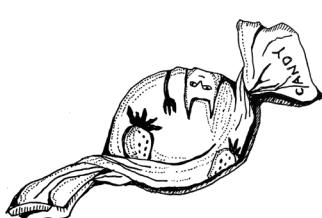
コンビニは真夏の清涼飲料水浸りすぎたら身体に悪い  
お囃子のどこがサビだかわからないみたいに消えた台風の号  
人間としては未熟な僕ですがセミなら長寿なだけのバケモノ  
光つたら負けのゲームをする夏と花火と君の魂の負け  
いつそ目を潰してくれれば楽なのに日光が成長を促す  
もうずっと夏かもしれない、夏が嫌い、海がぬるくて泣けそうにない  
抱きしめてもらわなくともいいように帯紐もつと締めてください  
玄関をあけたら進むしかなくて好きになるしかない夏祭り  
花火より綺麗だよって妄想に浸ついたらふやけたまぶた

## 回顧展 森屋たもん

「はじめに」はしつかり読んだ方がいい（結果的に眼の準備運動になる）  
アートって気分でもない人生にそれでも行く展覧会がある  
二百年前のテレビの香りに満たされてゆく猛暑日の午後  
撮影可の展覧会が増えているけど記念撮影は違くない？  
撮影の為にスマホを出したあと流れで開いてしまうX  
中庸を極めてどこの常設展にもいる画家が二・三名いる  
駆け足で回る回顧展の出口付近に立っている作家の死  
避けられない運命が僕の前にあるお土産コーナーもそのひとつ  
熱帶夜冷蔵庫から水を出すテレビもつけず音も要らない  
ICの残高だけが減っていくこのままどこかに終点がほしい  
冷房の効きすぎている部屋の中窓の外では夏をしていた  
古本屋買わずに戻す背表紙に知らない午後が少しだけ映る  
コンビニの明かりに照らす指の骨弁当を持つだけのかたちして  
窓際で伸びた観葉植物だけ生き延びているこのオフィスでも  
カーテンの隙間を抜ける夕立がきれいすぎては何も言えない

## X account

婆萎萎	@2000misaki0323
鳳凰原岬	@2000misaki0323
秋海棠	@2000misaki0323
タオピカミクルティ	@2000misaki0323
深山睦美	@57577_77575
武井窓花	@tanka_madoka
全美	@ZENMIN15
彩結ゆあ	@iromusubi_yua
森屋たもん	@monsontanka
きんかく	@kingkaku_tanka_
ただのたなか	@Shironopa_ka_



デザイン・編集：はるかぜ @spring\_bird\_gr

## ドロップアウト・サマー

## ただのたなか

自販機の下に転がる十円玉おいかけずにただ黙つて見ていた  
コンビニの一角どれも似た色の弁当をただ取つては戻し  
鳴り続ける誰かのスマホ駅の隅ホームにひとつ傘だけが立つ  
窓際で伸びた観葉植物だけ生き延びているこのオフィスでも  
カーテンの隙間を抜ける夕立がきれいすぎては何も言えない  
熱帶夜冷蔵庫から水を出すテレビもつけず音も要らない  
ICの残高だけが減つていくこのままどこかに終点がほしい  
冷房の効きすぎている部屋の中窓の外では夏をしていた  
古本屋買わずに戻す背表紙に知らない午後が少しだけ映る  
コンビニの明かりに照らす指の骨弁当を持つだけのかたちして  
窓際で伸びた観葉植物だけ生き延びているこのオフィスでも  
カーテンの隙間を抜ける夕立がきれいすぎては何も言えない

コンビニの一角どれも似た色の弁当をただ取つては戻し  
鳴り続ける誰かのスマホ駅の隅ホームにひとつ傘だけが立つ  
窓際で伸びた観葉植物だけ生き延びているこのオフィスでも  
カーテンの隙間を抜ける夕立がきれいすぎては何も言えない  
熱帶夜冷蔵庫から水を出すテレビもつけず音も要らない  
ICの残高だけが減つていくこのままどこかに終点がほしい  
冷房の効きすぎている部屋の中窓の外では夏をしていた  
古本屋買わずに戻す背表紙に知らない午後が少しだけ映る  
コンビニの明かりに照らす指の骨弁当を持つだけのかたちして  
窓際で伸びた観葉植物だけ生き延びているこのオフィスでも  
カーテンの隙間を抜ける夕立がきれいすぎては何も言えない